

農林水産政策審議会 第2回農林水産企画部会 議事要旨

I 開催日時 令和6年10月24日（木）15:00～17:00

II 場所 兵庫県私学会館3階第1・2会議室

III 出席者

1 委員

井藤 絵美 チームしんすけ農場
岩城 紀子 Smile Circle 株式会社 代表取締役
大山 憲二 神戸大学大学院農学研究科 教授
辻村 英之 京都大学大学院農学研究科 教授
都藤 元彦 株式会社都藤商店 専務取締役
中塚 雅也 神戸大学大学院農学研究科 教授
中山 晋吾 兵庫県農業経営士会 会長
長谷川尚史 京都大学フィールド科学教育研究センター 准教授
船越 照平 一般社団法人兵庫県食品産業協会 会長
堀 豊 吉備国際大学農学部 教授

2 県

呉田農林水産部次長、菅村農林水産部次長
ほか県農林水産部、環境部職員

IV 議事次第

1 開会

2 あいさつ

3 議事

- (1) 具体的な課題
- (2) ビジョン見直しの方向性

「資料2」により説明

〔 各委員から意見聴取（別紙「主な意見」参照） 〕

4 その他

5 閉会

主な意見

1 具体的な課題

委員 見直しのまとめ方は見やすくなっている。環境を大切にすることが必要であり、持続可能な状態に本当になっているのかが問題。持続可能になっていけば若い人も参入してもらえと思うので、この切り口で引き続き進めるといいと思う。

委員 全体として大きな3つの項目を述べられていて、産業、地域、県民という視点で構成されており、見せ方としては分かりやすいと思う。P7の畜産部分でいうと、ほかの産業では「環境と調和のとれた」という冠がついているが、畜産ではついていない。畜産業は環境関係でやり玉に挙げられることが多いので、他産業と横並びの書き方でなくていいのかと思う。(1)と(2)は両方とも環境に関係するので、そこを整理して「環境と調和のとれた」を記載してもいいと思うが、記載していない理由があるのか。

事務局 環境との調和は重要である一方、生産コストに見合った経営ができた上で環境との調和を図る必要があると考え、見出しには環境は記載していない。

委員 (1)と(2)をまとめるということも検討してみしてほしい。

委員 環境と調和がとれないと、この先の農林水産業は成り立っていかないと思うので、全体として環境との調和をうたい、個別部分では強調するときのみ記載してもいいかもしれない。

委員 耕畜連携については畜産と農業の両方に関係すると思うが、耕畜連携による飼料作物の増産が、農業ではなく畜産のほう(P7(1)①)に記載されているのは、理由があるのか。たとえば、畜産経営における飼料作物の生産を想定されているのか。②で堆肥の流通拡大を記載しているということは、出し手の畜産のほうに記載してあり、よいと思うが。

事務局 飼料価格が高騰している中で持続可能な畜産業を実現するためには飼料作物の増産が必要という意味で畜産の中に記載しているが、畜産農家だけが飼料作物を増産するという意味ではなく、耕畜連携を進めていく必要があると考えている。

事務局 今回の資料のI具体的な課題のページの構成について補足説明する。丸数字はこれまでの審議で出された意見について、あえて重複も含めて記載しており、これをそれぞれのタイトルのおりまとめている。ついては、今後はカッコ数字のタイトルと下線を引いた説明文が残ってビジョンに記載していくことになる。耕畜連携について畜産の部分に記載しているから耕種農家がしないという意味ではないが、課題として農業分野にも記載が必要であれば書き込んでいく。

委員 項目は整理されていると思う。原木の輸出は出発として重要だが、あくまで原材料なので、製材、製品を輸出していくことを考えないとゴールにならないと思う。労働力の確保は農畜林水産すべてに関わる課題で、就労環境の整備というのを書いているが、非常に難しい問題なので中身を充実させていかないと機能しないと思う。地域資源を活かした地域づくりの記載があるが、重要な課題であり、地域の自然などの資源を活かしたベンチャーなどもこれから欠かせない方向性で、地域の学校で歴史などを教育していただく必要があると思う。木育を新設していただいて感謝している。積極的に都市住民の方に森林環境教育をしていただきたい。一過性のイベン

トではなく、カリキュラムとして農山漁村の教育をしていくことが人材育成につながっていくと思う。環境との調和については、森林林業分野の記載は産業としての面が多く、環境面では炭素固定などに限定されているので、防災や生物多様性など環境全般への配慮を理解できるように整理して、中身を充実させてほしい。

委員 P 8 (3) ②③非建築分野の需要拡大や輸出など大事な要因だと思う。加えてスギ・ヒノキの大径木の製材利用がネックになっているので検討いただきたい。大径木は、現在主流となっている自動製材機では扱えず、生産コストが掛かるため、森林所有者に還元できる価格が付かない。一方、コナラ・モミ・ケヤキなども大径木化が進んでいるが、従来薪炭・製函・社寺仏閣建築等での利用が減少しているため、今後の活用方法に光を当てる必要がある。特にモミは、そうめんの箱として本県では利用されてきた。名産である揖保乃糸の商品パッケージの付加価値として製函での再活用など新たな需要拡大への支援も検討できないか。P 9 (4) の県産木材の認知度について、一般層が木材を購入する主なルートであるホームセンターでは県産木材が手に入りにくい。材木屋や木材市場などが積極的に門戸を広げ、県産木材を身近に手に入りやすくしていく必要がある。

委員 P 1 4 (1) 環境負荷低減のところには有機農業の記載がないが、前のビジョンでは環境創造型農業と有機農業が併記されている。環境保全型農業が有機農業を含むということか。含む場合でも、有機農業の記載があった方がよい。

事務局 有機農業も含むと考えている。

事務局 タイトルを環境と調和のとれた農林水産物としているが、説明が農産物のみの書きぶりとなっているので、もう少し幅広くとれるように修正する。

委員 今はスマート化している農家も多いが、3Kのイメージを持っている子どもも多く、農業に興味を持ってくれない。トライやるウィークの受け入れをしているが、授業の一環として農業に関わる時間を作ることも必要かと感じた。

委員 水産については、必要などころは網羅してもらえていると思う。前回審議会ではスマート漁業の記載がないところで引っかかっていたが、ICT 等先端技術の活用という書きぶりで記載いただいているので問題ないと思っている。P 1 3の海業の話も具体的に記載いただいているので問題ないと思う。

委員 P 1 1 (1) の下線部の説明書きについて、家畜防疫体制の強化が書かれているが、植物についても記載が必要ではないか。

委員 未来のサステナブルなことを記載する場所ではないかもしれないが、2050年くらいに向けて、藻類に関する研究をしている企業が多い。スピルリナ、ユーグレナなど、タンパク質も豊富でエネルギー源にもなる。今記載されているのは、今あるものをどう改善していくかという内容だが、もう少し先のことを県としてどうするか考えてもよいのではないか。

委員 どうしても記述に近い目標になりがちだが、ビジョンとしては未来を考えることも課題として、なにか示しておくことも重要ではないか。

委員 P 1 1の食料・消費の中に(1) ①重大家畜伝染病が書いてあるのは、消費者にアピールするという意味か。畜産の部分には書いていない。

事務局 前回までは農畜林水の4項目しか整理していなかったが、食料安保の問題、米・鶏卵の供給が不安定になっている問題があるため、消費者目線での整理をさせていただいた。後ほど出てくる3つの基本方向でいくと農林水産業の実現の中に食料を安定供給していくという整理で植物防疫も含めて記載していく。防疫措置は生産するのに

不可欠なので、どちらの課題にも記載していくべきかもしれないが、整理上食料・消費に記載しているということをご理解いただきたい。

委員 P12～13の農山漁村の部分で、地域資源を活かしたという表現はあるが、農業インフラの管理や草刈り、「地域計画」はどこにあてはまるのか。(1)～(7)のどこかに入るのか、それとも農業の部分に入るのか。

事務局 地域計画はP6の(6)担い手への農地集積の部分が一番関係が深いので位置づけているが、地域計画を進めていくには地域の話し合いが必要。また、地域計画を進めることと地域資源の活用は密接に関係してくると考える。草刈りや基盤整備も同じく(6)に優良農地の確保、生産基盤の確立として記載しているが、環境にも関係するし、農村RMOなどの組織の話にもかかってくると思っている。

委員 農業環境問題と農村問題は分けて考えた方がいいのではないか。農地やため池、水路をどうするかなどと、総合的な農村問題は分けた方がいい。P14の7の環境負荷低減は違和感のある見出し。ほかは分野で分けているので、どういう位置づけなのか。言葉として消極的なので、循環型社会をめざすなどとし、場合によっては最初の項目として位置づけてもいいのではないかと思う。最後に置いておいてもいいが、検討してほしい。

2 ビジョン見直しの方向性

委員 P16の「環境と調和のとれた持続可能な農林水産業の実現」が一番大きなタイトルだと思うので、農畜林水産業それぞれの部分もこの目標に向かう形で記載してはどうか。

委員 中小零細の事業者は経済の毛細血管であり、毛細血管の数だけ強靱な経済社会になると教わった。農林水産業に従事する人々はやはり中小零細の事業者が多い。彼らの仕事に対する正当な対価と評価が必要だが、昨今の米の価格高騰の際の騒動を見るにつれ、当たり前と感じていた事が変化する時にアレルギーを感じる国民性なんだなと思った。所得向上を前面に出すと県のビジョンとしてふさわしくないかもしれないが、生活が維持できないと環境も維持できないので、記載を検討いただきたい。

委員 「環境と調和のとれた持続可能な農林水産業の実現」の中に、「ブランド力を高める」などの利益確保、経済性引き上げの方策がでてくるので目立たず、重視していないように読めてしまう。利益確保の方策については分けて、目立つようにしたらどうか。

事務局 「環境と調和のとれた」というのは儲からなくてもいいということではなく、すべての産業が環境に配慮していかなくてはいけないという意味。ただし、基本方向に「儲かる」との単語を記載するかどうかは悩んでいるところ。

委員 「持続可能な」という言葉は経済性引き上げも含むので、そのことは理解できるが、それでも経済性について分けるか、目立たせるか。

委員 ひとつ上のカテゴリーに循環社会の実現を記載し、基本方向には経営的な攻めの部分を書いてもいいかもしれない。

委員 若い人が参入できるよう、所得の保障についても記載すべきではないか。

委員 正社員として雇用していた従業員が退職することになった。就業時間や休暇、給与等が原因。免許取得や給与等で相当配慮してきたつもりだが、農家の努力だけではどうしようもない部分がある。また、後継者不足の原因として、大型機械のメンテナンスや更新費用が出せないということがあるので、必要な時に貸し出すような仕組み

ができればと思う。

委員 農山漁村のところ、「地域資源を活かした地域づくり」はまとめすぎな気がする。資源を守り、維持していくことと、新しい農村ビジネスを作っていくことは違う。地域づくりとは何かというのがぼやけてしまう。分けた方がいいのではないか。守る部分は、防災・減災部分と近くなるかもしれないのでご検討いただきたい。また、まとめが「多様な人材が活躍する」でいいのかよく検討してほしい。農村がどうあるべきかという理想をここに掲げるべきだとは思う。

委員 推進項目の比較表、大きな基本方向としてはいいと思うが、推進項目2需要に応える～という書きぶりについて、神戸ビーフは需要が旺盛で供給が足りないということを目指しているのかなと思うが、ほかの畜産物については現状がどうなっていて、2の見出しで網羅できるのかは考えていただきたい。

委員 採卵鶏はケージで生産しているが、ヨーロッパではアニマルウェルフェアが重要視されており、そういう飼い方はいけなくなっている。アメリカも半々と聞いている。日本は高温多湿で病気のこともあるので適した飼い方をしないといけないが、大手ハンバーガー店などはバイヤーから放し飼いの卵を持ってきなさいという話が出ている。アニマルウェルフェアが日本で浸透した場合、養鶏業は難しいなど感じているところ。2035年にはそういった状況になっているのではないかなと思う。

委員 森林林業については、森林組合と事業者関係の記載が中心になっている。所有者がどういう意向を持っているのかによるが、小規模林業をどうするのか、土地の管理全体をどう管理していくべきなのか、方向性を県として打ち出していく必要があるのではないかな。林業の場合は機械一式が5～6千万かかる。ヨーロッパでは兼業林家が農業用機械にアタッチメントをつけて作業しているところもある。農業林業を一体的に考えることもあっていいのではないかな。

委員 農家であっても農業だけでなく新しい形を実現しようとしている人などを後押しできるとよい。

委員 見直しについて、一番重視されている部分が「環境と調和のとれた」、というものであるのは全員の共通認識だが、「地域」についても同じく重視されているように思う。ただ地域資源という言葉は少し広いので、具体的に何を指すのかの説明がいると思う。

委員 県の農林水産施策はもう少し幅を広げていくべきではないかと常々思っている。産業だけでなく地域や食に対しても意識を向けるのが今回のキーだと思う。儲けること、サステナビリティが重要。そういったことが目指すべき方向性なのではないかなと思う。食に関する部分は弱い気がする。理解醸成というのは手段として弱く成果も分かりづらい。流通面などをもう少し検討してほしい。推進項目について、産業が6項目、あとは2つずつというのも気になる。もう少しあとのふたつに重みがあってもいいのかなと思う一方で、前回からみると重みが増しているのでもいいとは思っている。県の組織にも関わることを思うので、しっかり議論をお願いしたい。